

その 293

## クローズアップ21

### 自治体や民間企業との連携強化を 増毛ゴルフ倶楽部

#### 魅力ある観光資源を生かし、地域創生を目指す

地方創生とは、自治体や民間企業、住民といった地域の主体者が産業振興策など特色のある施策の推進により、人口減少を抑止し、持続可能な社会の形成を目指す政策または一連の取り組みを指す。

今回紹介する(株)増毛ゴルフ倶楽部(北海道増毛郡増毛町、18H)は、増毛町や地元有力企業、町民らが出資した第三セクターで1985年(昭和60年)に設立、1989年(平成元年)に同倶楽部をオープンさせた過去を持つ。増毛GCは旭川空港から約2時間弱の場所に位置しており、増毛町自体は令和7年5月末現在、人口は3462人(※外国人登録人口116人)となつている。甘エビ、ポタンエビ、タコ、ホタテといった水産物と、リンゴやサクランボなどの果物が特産品として挙げられる。もちろん温泉も健在で、日本最北の日本酒蔵「国稀酒造」もあり、知名度はまだまだ低いゴルフ場だけに限らず、ポテンシャルの高い観光資源が多数存在して

いる自治体である。

今回は増毛GCの小林等統括支配人を中心に、国稀酒造(株)の本間櫻取締役部長、そして堀雅志増毛町長にも話を聞いたので順に紹介していきたい。

#### 魅力ある観光資源が多数 増毛町の地域創生に期待

「私は6年前に当倶楽部の支配人として就任しました。地域創生に力を入れたいと思つたきっかけですが、地方ではよく聞く話ではありますが、当時私が当倶楽部に来た時は「ゴルフが上手い人間が威張れる場所」のような雰囲気がありました。若者にゴルフをやってもらうために



増毛GCの小林等統括支配人

旭川空港から増毛GCまでは約2時間弱



は、これでは入りづらいと感じました。若者にゴルフをやってもらうためにゴルフ場として門戸を広げるために、この増毛町を見た時に魅力ある観光資源が多く、観光としても確立しそうだと思った時に、ゴルフ場のみではなく、観光でも注力しているのかと思っていたのですが、地域活性的な取り組みは悲しいことに一切何もしていない町でした。現時点では、個人個人の企業がそれぞれ動いているだけで、このような状態だとゴルフ場は戻つばみしていく雰囲気がありましたので、まずゴルフ場に対してのお客様（会員）に意識改革をしていただくこと

今年4月に増毛GCのアドバイザーに就任した岡森雅昭氏も増毛町の可能性に期待を寄せている



思い、ここに着手しました。やはり会員様が協力的になつていただけると、ゴルフ場は自ずと生き残つていけると思っているからです（小林統括支配人）  
現在の会員数は約300名で8割以上は定期的に利用しているそうだ。また年間の入場者は1万人弱でそのうち44%が会員だという。会員は地元住民が多いのでそれぞれつながりがあるケースが多いそうので、会員の職業でいうと漁業、農業、木材関連など、多種多様だという。

「今日まで増毛町の方々はゴルフ場に対して、タイアップ

といった連動企画などを考えたことはほとんどないと思えます。強いて言えば、三國清三シェフ監修のホテル『オーベルジュまじけ』（全28室）とのゴルフパック宿泊プランやオープンコンペぐらいだと思っています。はつきり見える化としてホテルでゴルフ代等をすべてお支払いいただき、ゴルフ場では支払いが発生しないシステムを取り入れています。宿泊プランは旭川市や札幌市から来るお客様の利用が多いです。利用者数は全入場者の約5%ですが、増毛町は飲食する場所や宿泊する場所がかなり限られているので、これは継続する必要があります（小林統括支配人）

小林統括支配人は、長崎県五島市の観光事業に携わる三石茂樹氏（矢野経済研究所）とのつながりもあり、ゴルフ場と自治体がうまく連携し、地域創生のモデルケースになっている五島列島（福江島）を昨年3月に訪れたという。

増毛町は甘エビ、ボタンエビが非常に有名（画像はうしだや 増毛店）



「地域創生の何かヒントになるものがある」と思い、また海（漁業）や酒蔵など共通点もあり、五島に行きました。三石さんは地域とのつながりをしっかりと作っておられましたし、苦勞した部分も垣間見えましたが、私



さくらんぼやりんごが有名だが、増毛町は「日本最北の果樹産地」と言われている



三國清三シェフ監修のホテル「オーベルジュまじけ」

個人的には得るものが多々ありました。結局のところ、ゴルフ場単体でできることは限られていますので、行政に落とし込めるだけの発言力は今の当倶楽部にはないので、何か機会があつた時に話ができるように見聞を広げたりと準備はしています」（小林統括支配人）

地域創生のため、ポテンシャルの高い地域の観光資源との連携強化もこれからの課題の一つだというが、「増毛オープンと秋の年3回開催しているのですが、漁業関係者及び果樹園等に

特産物を中心とした景品をご協力いただいています。様々な地域からの参加があり、参加者は95%がビジターですが、毎回約130名集まって非常に人気です。周辺の観光資源と協力して成功できた例の一つだと自負しています」と小林統括支配人は話す。

「現状、周辺の観光資源は個人で確立されているので、ゴルフ場主体で話をする、なかなか話がまとまらないケースも少なくないのです。現状の行政の取り組み方を見ると、地域だけでお金をまわす——ような感じなので、なかなか厳しい状態です。タイアップではないですが、当倶楽部のプロモーションを行う際には、周辺にはこんな観光資源があります」といったご案内はもちろんさせていただきます」（小林統括支配人）

現在、札幌にある観光の支援団体が主体で増毛町のゴルフ場を活用したウエルネスツアーを実施しており、補助金が導入されているケースもあるという。「この増毛町は四季ではなく、

ひと月、ひと月で顔つきが変わる町だと思っていますので、一度の訪問で飽きるような町ではありません。春に名産のエビやタコを食べて、夏に涼しさを満喫しながらサクラランボを食べ、秋に果樹園でブドウを楽しんだりできますし、その中のツール一つとして、ゴルフ場を活用していただきたいと思っています。ゴルフ場利用税を納めている関係もありますし、今後も観光に関して自治体とやりとりを続け、ゴルフツーリズムの実現を視野に入れていきます。なにより「増毛町」の場所、認知度を上げていかないと何も進まないと思います、SNSの更新を強化しています」（小林統括支配人）

次いで増毛町の貴重な観光資源の一つである、国稀酒造の本間櫻取締役部長に話を聞いたところ、「国稀酒造は明治15年（1882年）に創業した日本最北の酒蔵です。レギュラーなもの24銘柄、トータルですと約50銘柄あります。年間の観光客は14万人で日本の他、台湾やタイ、



国稀酒造(株)の本間櫻取締役部長

シンガポール、香港の方もいます。欧米の方はまだ少ないです。台湾人の従業員を2人採用し、インバウンドに対応しています。海外用のHPもあります

堀雅志増毛町長



し、オンラインシヨップの他、SNSの投稿にもかなり注力しています。増毛GCとは「国稀カップ」（年1回開催）というオープンコンペで連携し、一緒に地域を盛り上げています」と話した。

**地域の魅力を伝えたい  
未来に向けた町づくりを**

今回、小林統括支配人、そして今年4月に増毛GCのアドバイザーに就任した岡森雅昭氏（一般社団法人日本ゴルフフィットネス協会・代表理事）と増毛町役場に行き、堀雅志増毛町長に地域創生の展望について少し話



北海道随一の彫刻神社として知られる厳島神社

を聞くことができた。堀町長の話を紹介して本特集を終えたい。「日本海側はどうしても観光客が弱いです。増毛町にはゴルフの他、雪質の良いスキー場が、そしてエビやタコといった海の幸、増毛町は日本最北の果樹産地で果物が非常に美味しいのです。温暖化で産地が北上化しています。山形県のサクランボも3年連続不作となっています。農業の面ではお米が非常に好評です。果樹を含めた、お米のブランド化にしても全国的に勝負になるのではないか——と思っ

ています。その味覚と自然や歴史、アクティビティを組み合わせて進めたいかなければならないと思っています。

そして現在、職員に副業を認めています。4月になると30名ぐらいはサクランボのもぎ取りに行っています。英語なども勉強してもらおう必要もあると思います。個人的には職員にガイドもやってもらいたいと思っています。

話は変わりますが、増毛に移住していただきたい想いもありますが、11月〜3月は非常に大変です。増毛は30℃を超えるのが年に数回で、快適に過ごせる夏の良い時期に期間限定でもよいですから、異地域移住に期待していますし、有難いことに釧路市からたくさん来ています。増毛町のHPでは移住・定住、空き地・空き家、お試し住宅についても紹介しています。この増毛で楽しみを見つけ出して、そして仕事をしていただきたい



毎年開催している「増毛春の味まつり」は好評で、今年は2日間で約1万9000人の来場者が増毛のごちそうを堪能

ですし、これからはこのような考え方が必要と感じています。毎年土日に開催の『増毛春の味まつり』は好評ですが、平日でも来ていただけるような仕掛けも必要だと思っています。『だれもが住みたい・住み続けたいふるさと増毛をめざして』これは私が2015年2月に増毛町長に就任した時から一貫して掲げてきた、まちづくりのテーマです。増毛町も人口減少がさらに進み、JR増毛線の廃止もありましたが、職員と一体となって『増毛町』の良さをもっと発信していきたいと思っています」